
眠れる獅子は目を覚まさない

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れる獅子は目を覚まさない

【Nコード】

N2521G

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

この話はわしがまだ小さかったときのお話じゃ、とほら吹き爺のトッドはやはり本当に嘘の話を教えてくれた。*毎度の如くあらすじは嘘です。

俺たちみたいな人間が儲かる世の中なんて物は最悪だねと私の師匠に当る人物は常日頃から言っていた。それでも儲からなければ金にならないし金にならない仕事を続ける人はいない。当然の如く儲かっている場所に人は寄りつく物だから最初のうちは皆こぞってこの職に就こうと必死だった。しかしながら全員がこの仕事に就くとなると供給量が減るしこの仕事にはある程度『才能』と『慣れ』が必要なので人気が出たからといって食い扶持に困るようなことはない。師匠はさっきの言葉と同じ程度にこの仕事をやっていると世の中の仕組みがよく分かるんだとも言っていた。私もその意見に賛成なのでそうですねとか師匠は凄いなどと気のない相づちを打っていた。しかしまあ相づちというのは大体気のない物でもあるからいいだろう。

今日も今日とて仕事仕事。戦場を探して飛び回る。このご時世に戦場など腐るほど存在してはいるが金になる戦場は少ない。ほとんどやけっぱちみたいに新型兵器を投入して文字通り焦土と化す戦場には興味が無いし大体そんな感じの戦場は一目で判断できる。一番判断に困るのはゲリラに対して人海戦術を取っている戦場だ。上手くいけば金がこれまた文字通り湯水のように湧き出てくるがひとたび判断を間違えればその日の苦勞がチャラになる程度にリスクが付きまとう。最後の最後までどちらに転ぶかが分からない戦場ほど私たちにあって嫌らしい物はない。

今日の師匠はそんな胸中を知らずにゲリラ戦が展開されている戦場へ向かう。まだ独り立ちしていない私は影のように付き従うしかないのだがこの判断は果たして正しいのだろうか。嫌な予感はいつも思っているが今日はいつも増してそれが酷い。まあこれもいつもいつも思うことなのだけれど。

地獄絵図と化した市街地が見え始める少し前から銃声が聞こえ始

めた。その中に獣の唸り声のような物が聞こえた気がして師匠を見るがんなもん聞こえてねえよと言われすいません勘違いでしたと引き下がる。新しく投入される兵器の大半が一撃で人間の上半身をかつ攫っていくような物ばかりなのでそれいつらがいるかいなかで商売の結果が大きく変わる。できるかぎり無傷の死体を拝みたい物だと思いつながら棺桶を引きずる。取扱説明書には優しく扱ってねと書いてあるのだがそんなもの戦場で要求されたって仕方がない。仕方がないついでにもつと頑丈に作って欲しい物だと思つたらもつと頑丈に作れよなあと師匠が隣で呟いた。どうせならいざとなつたら隠れられるぐらいに頑丈な奴に。でもそんなのが開発されても意味無いでしょう。確かになあ。そんな技術があれば兵器の外装になつてますって。そうだよなあ。

ほとんどの建物に火が放たれ焼け落ち黒々とした建物の名残が地面から生える。ある意味芸術品だとも言える光景だなあと思つていたらすぐ近くでフラッシュが焚かれた。見ると一人の年若いカメラマンが師匠と私と建物を絶妙な斜め下からの構図で捉えていた。地面に寝そべりながらカメラを構えるとは中々体張ってるなあと師匠はカメラマンに声を掛けカメラマンは起き上がりながら仕事だからですよと応じた。名前は？ と師匠。僕は富竹フリーのカメラマンさ。それってどっかで聞いたことあるなあ。最近見つけたゲームの中であつたセリフを使つてます。あれか思い出した。そうそうあれです。随分古いな。古い物でも良い物は良いですよ。けどそのセリフは戦場じゃまずいんじゃないか？ そうですなあでも逆に考えたら向こう数日は生きられるってことじゃないですか。

談笑している間にも戦況は刻一刻と変化していく。そここに上がる悲鳴と罵声と怒声がみんな違ってみんな良い。断末魔もこれだけ絶え間なく流れ続ければBGM程度にしか聞こえなくなるから不思議だ。不意に上がるからビックリするのであつて何度も体験していれば慣れるという人間の習性を如実に物語っているようで戦場は面白い。だからどうしたと思つているとまだ焼け落ちる寸前の建物

が爆発して飛来する影。どさりと大して面白くもない聞き慣れた擬音と共に死体は転がる。綺麗な死体だった。上半身と下半身が引き千切れる寸前の状態でさえ無ければ。

なんていうか無情ですねえとフリーのカメラマンこと富竹さんが死体を目の前にして呟く。口から出た言葉とは対照的に目にはカメラマンとしての喜びがともされあやっぱりこの人も職人気質なんだと思う。何度かフラッシュが焚かれてフラッシュが止んだと思ったら富竹さんは無造作に上半身を蹴り飛ばした。腸を下半身から伸ばしながら死体は転がる。綺麗だった上半身に泥が付いて芸術的から現実的な一つの画になる。こういったものが好まれる時代が来ると誰が想像できただろうか？ そんなつまらない質問に答えることの出来る人間はとくに皆死んでしまった。遙か昔の戦前生まれは世界名鑑を引いても出ることはなく漏れなく全員が戦中生まれになっっているこの状況は異常なのだろうかと自問するけどやはり答えてくれる人は……。もういいかい？ まあだだよ。師匠と富竹さんはなかなか馬が合うのか掛け合いも上手い。置いていきますよ？ さっさと死体集めてきな。

素気ない返答に少々落胆するがむしろ一人で行かせてくれると言うことは独り立ちも近いということだろうか。師匠に買われてから早六年。色々なことがあったような気もするけどそのほとんどが死体集めの繰り返し。埋没埋没で何があったか思い出せない。思い出せるのは師匠の肌は少し温かかったということぐらいだろうか。葬儀屋は基本的に高温なんだよと師匠の言葉が頭に浮かぶ。

かつては路地裏だったところも綺麗に均されたように平地となつて来たるべき掃討組の到来を待ち望んでいる。最初は大雑把に。後からきつちりと。てつきりゲリラとその掃討が行われているかと思つたら違っていたのだ。これを見越してこの戦場を選択したとなるとやはり師匠は凄い。他の商売人には無いルートを持っているし先見の明があることはこの場で証明された。市街地の南側つまり私の前方に向かって叩き壊しは進んでいる様子。これならその後には付い

ていけば余計な戦闘に巻き込まれずに済むし死体の回収も出来てなかなか良いのではないだろうか。北側から入ったのもこれも先を見越してのことだったのか。

勝手に感心していると遠目に転がる死体を発見。地面に血は広がりこそすれ頭が消し飛んだり腹がぱっくり割れていたりといった目立った外傷は全く見られない。近づいてみるとそれが若い女の死体だと分かる。うつぶせに倒れているが体をくの字に曲げて何かを覆い隠そうと必死な様子だ。ぞんざいに死体を師匠がやったように蹴り上げてめくってみるとうめき声が聞こえた。死んでいると思っていたのに生きていたのかと思っただがどうやらそれは間違いのようで血にまみれた五歳ぐらいの女の子がこちらを見ている。若い女の血が目に入っているせいで白目の部分が赤く染まり一種異様な鬼気迫る物がある。戦場の中にもう一つの戦場が入れ子構造になっているような正直この喻えも恐らく意味をなしていないであろう根本的な何か。生命の躍動とはかけ離れているのにそれと同質の物がそこにあると言い換えておこうか。何にせよ言葉に還元するのは難しい。

ハロー元氣と問いかけても全く動かない少女は果たして本当に生きていたのだろうかと不安になってくる。まあ死体が一つ増えたところで商売には前向きな影響しか与えないしどっちでもいいのだが生きていたとしたら何か反応してくれないと非常に辛い。善悪生死天地火水なんでもいい。そんな感じの両極端な物が同時に存在しているのは気持ち悪いし赦せないっていう傲慢さを兼ね揃えるぐらいに私は人間なのだ。ハロー元氣ともう一度繰り返し返して反応を見るが無反応。この問答も長くなりそうなのでさっさと仕事を済ませるために棺桶を取り出して若い女の死体を収容する。死んで動かないので単純な重さとしては軽いのだが力が入っていない体を持ち上げるのはかなり苦労する。しかも今回は外傷こそ目立たないけれど血にまみれているため非常に滑る。悪戦苦闘していると不意に死体が棺桶に滑り落ちた。何かかと思っただけで何のことはない女の子が若い女の死体の足を持って棺桶に突っ込んだのだ。殊勝な子どもであ

る。これってママ？ と今度こそは反応していけると思い聞くとやはり反応はない。なんだろうイライラするな。

そうかそういうことだったのかと突然の天啓に驚きを隠せず地面に広がる血でまだ血に濡れていない地面に文字を書く。これってママ？ うん。どうしてママをこれの中に入れるのを手伝ってくれたの？ 助けてくれるんでしょう？ ある意味では助けることになるのだが女の子が言うような意味での助けには残念ながらならない。元通り幸福な家庭を営むためにこの子のママは蘇るのでは無いのだ。用途は色々性欲のはけ口や兵士や生体実験のために生き返ってしまふのだ。でもそんなこと面と向かってこの子に言う度量を私は持ち合わせておらず教えられたとしてもきつとこの子がその意味を理解するのは後々になってからのことだろう。こうやって虎と馬はこの世に生を受けていくのだ。

そんなことで時間を潰しているうちに戦闘音はかなり南下していったようだ。どこか遠くでパレードが行われているような静寂を切る音律。パレードという響きが持つ気持ち悪さを論じようかと思いはめるほど遠くから聞こえる断末魔はねじ曲がって異様だった。断末魔を聞くとしたら近場で聞いた方が良いでしょうとさつきからブンと戦場を飛び回るバグに伝えてやりたい。お茶の間に悲惨な光景を届けるのに熱心なこった。棺桶を閉じてこれからどうしようかと考える。そんなことを一々考えないといけないから独り立ちできないのだろうかと新たなテーマが鎌首をもたげてきたがそれは黙殺。どうしようの三乗根。何も考えることが無くなってきたのでぐるりと首を回すとああそういえばこの子はどうなるんだろうと今さらながら思った。親が死んで耳も聞こえずどうしていいのか分からないという点においては自分と同じだという安心感からこの子を手放すわけにはいかないとぼんやり思う。そうだ同類は多ければ多いほどいいのだ。朱に交われれば赤くなる類は友を呼ぶ三人寄れば文殊の知恵。

これからどうするとママの血を使って地面に書き殴る。そろそろ

この辺の地面に書ける場所が少なくなってきた。死ぬよと私が書き殴った場所の隣に小さく可愛らしい丸文字で女の子は書くがその言葉に対して三つの意味で驚きを隠せない。一つめはこんな女の子が死ぬなんていう後ろ向きで退廃的な言葉を書いたこと。二つめは『死』なんて文字を書けたと言うこと。恐るべし推定五歳児。三つ目は行き先の分からない自分と同類だと思っていた子どもがいささか後ろ向きではあったが明確な目標を持っていたことだ。なんという完全に敗北を喫した形になってしまった。かっこわるい。悟るのに年齢は関係ないという生きた例に会えて光栄ですと日記帳があれば書き込んでおきたい。

おい何ぐずぐずやってんだ。今まで喋ってた師匠に言われたく無いですって。うるせえ俺も一つ死体を収容したところだ。それって？ 富竹さんだ。あらら。これだから毎回死ぬような奴のセリフを言っちゃいけないんだ。意味がよく分かりません。死亡フラグってことだ。で？ この子どうしたらいいでしょうか？ んなもん決まってるだろ。殺せと。馬鹿野郎連れて行ってことだよ。

何気にヒューマニストなんですとねと言うと師匠は照れ隠しに道ばたに転がっていた迫撃砲を南方にむけて放った。ろくすっぽ照準もあつていない滅茶苦茶な軌道だったがそれでも向こう側でどよめきと共に阿鼻叫喚断末魔の叫び声。女の子は唐突な師匠の登場に戸惑っているみたいでやっぱり年相応なんだと無意味に納得して悟り負けした屈辱を払拭する。あああああそんなことやってる自分のなんたる小さいことか。師匠から遠ざけると共にまだ血に濡れていない地面まで少女を引っ張ってまだ残っているママの血で地面に書く。名前なんていうの？ ミチル。ミチルは死にたい？ ……ミチルは何も書かずそっぽを向いてしまふ。何が機嫌を損ねてしまったのか皆目見当が付かなくあたふたしていると師匠が隣にやってきて血で文字を書く。多分この血は富竹さんのだ。ミチルちゃんはどうしたいの？ 今までへそを曲げてそっぽを向いていたミチルは師匠の文字を見ると渋々といった感じに血で文字を書こうとする。呼び

捨てが駄目だったんだぞオイ。なるほど。もうちょっと他人の気持ち慮れ。その顔で言われても。ミチルは私と話していた時とは違うたどたどしい字を地面に書いていく。

ママのところいきたい。行きたいのか生きたいのか逝きたいのか。瞬時に頭を駆けめぐるがそんな私を押しつけるように師匠が一步前へ出る。死にたいのか生きたいのかどっち？ ママは……。ミチルちゃんの望んだとおりに生き返る訳じゃないんだ。ママがママじゃ無くなるってこと？ そういうことだよ。じゃあ意味ないじゃん。死ぬのも意味がないと思うけどな。師匠は五歳児相手になかなか厳しいことを言う。しかし酷だ酷だと遠ざけているのもいけないのだがシヨック療法にしては度が過ぎているような。こんなのはシヨック療法でもなんでもないのであれど。

北側から南と同じパレードの音が聞こえ始めた。そちらは南と違って断末魔のハーモニーは聞こえず淡々と行進を続けている感じだ。輸送機から次々と蜘蛛のような形状をした多脚戦車が飛び降りていくのが見える。ひらりひらりと舞う木の葉のように地面へ。そしてパレードの列に加わる。もう行かないといけないなと師匠は言っただけの有無を言わせぬ口調で女の子の手を引く。ちょっと待ってくださいよ付いてくるかどうかはこの子の自由意志でしょうがと言う私の言葉に対しては意味無く死んだら意味がないだろうかと字面を見るだけでは非常に論理的な答えが返る。どういう理屈ですかそれと言うより先に脳内に警戒アラートが鳴り響く。距離四千速度不明。迫撃砲かと思うよりも先に体が動いて師匠の前に立つ。足の裏からパイエルバンカーを打ち出して体を固定し皮下に隠されたマテリアを三六〇度展開。微細な粒子とも極薄の膜とも取れる限りなく透明に近いブルーが辺りを満たしどうにか防げるようにと願うと同時に四発着弾。外装に軽微な被害。馬鹿マテリアなんて使うなよ勿体ないとさり気なくでもしっかりとミチルを庇いながらの姿勢で師匠が叫ぶ。減価償却する前に死ぬんじゃねえ。分かっていますよと返す前にもう六発。爆風と鉄片がマテリアに食い込み結構マズイ。展開したマテ

リアを閉じ師匠とミチルを抱えて走り出す。外見は人間と同じでも運動能力は私の方が圧倒的に上だ。それもこれも一度死んだから出来ること。師匠には感謝してもしきれない。

これからどうしましょうとフレアを連発しながら照準を外しつつ聞くと師匠の声が途切れ途切れに聞こえる。そりゃ決まってるだろうが家族になるんだよ。え？ 聞き取れませんでした。だああもう！ お前ってやつあ一世一代のプロポーズを……。富竹も生き返らせて四人で暮らすんだよ。なんていうか非生産的過ぎじゃないですか。それが人間の美徳ってもんよ。それにミチルのママは生き返らせないんですか。お前が嫉妬するからさせない。ワタシロボットダカラワカリマセン。だああああもう！

季節はもうすぐ秋、秋刀魚の美味しい季節です。

(後書き)

読点は控えめに使ってこそ華

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2521g/>

眠れる獅子は目を覚まさない

2010年10月8日15時11分発行